

○松坂古蹟址

金城深秘録に云ふ。松坂門の邊は往昔は松原にて、此門外は墓地なりしを、前田家築城の時一ヶ所へ取集め、舊跡に石を建てられたりと。又云ふ。松坂門櫓續き土藏下に堅石一石あり。往昔七里參河守等居住の頃、此邊墓所なりしを、後築造の時此に集め、石碑を建て、舊蹟を残し置かれたりと。又同所新五郎塚は、往昔の儘指置かれたる様子にて、此の塚邊にある竹木等を伐り取るには古實あるよし傳言す。故に享和年中此所の石垣普請の節も、墳墓へ斷り申入れ取掛りたり。昔より不思議の事どもありと云ひ傳へたりとぞと。又云ふ。往昔本丸に本源寺ありて、下間法橋等居住の頃は、土民ども信仰して、本丸の地を上品上生の臺となし、參詣する道の橋を極樂橋と名付けたり。其節の手水鉢の石二つある内、一つは今もあり。一つは薪丸の下櫓臺に積込有之と云ひ傳へたりと。三州志來因概覽に云ふ。昔本源寺城中にありし頃は、死人の葬棺を極樂橋下より送りし故に、此遺名ありと傳承すと。又云ふ。今小立野牛坂邊に古塚多し。皆大にして庶人の墳墓に非ず。此邊中秋弄月

の最勝景なり。臨田如鏡は高麗陣の擒にて朝鮮人也。然るに此邊若松山、淺野河映帶せる勝景、故郷の風景に彷彿たりとて、思郷の淚行をなすと也。詩歌者流此古墳の頂に登りて月を賞す。然れども酎酒多時なれば墳靈妖祟をなすと云ひ傳へたり。或は思ふに本源寺尾山在城の頃、其徒の賊魁の古墳にして、驕奢を以て巨大に築きたるか。何れにも是等の古墳はあばき見たきもの也。墳靈の妖譚を怯れ、あばくを泥むは少量の事なり。墳中に埋碑文にてもあらば、徵古の一快事ならんかと。平次按するに、箕浦高良筆記に、城内御墓と云ふは、本願寺七代廿五日の上人、今四十萬村の山へ移すと載せたるも、そのかみ松坂にありたるなるべし。

○二、丸諸櫓

寶曆五年幕府國目附衆尋問の答書に、

二之丸櫓

貳ヶ所

但二所共

二重

上の重 二間三間

下の重 三間五間

同所櫓

壹ヶ所

二重

上の重 二間三間

下の重 三間五間

同所櫓

壹ヶ所

二重

上の重 二間三間

下の重 三間五間

金城深秘録に、二、丸等之部

菱御櫓

石壇一つ

橋爪一、御門小櫓

出し一つ

松坂御門續御櫓

右の如く記載すれば、寶曆九年火災以前は櫓四ヶ所ありしかど、火災後再造なかりしと聞ゆ。櫓の中にも菱櫓は、橋爪門の續き、五十間長屋の角に櫓臺ありて、地形菱形なりし故に菱櫓と呼べり。橋爪門の小櫓は、橋爪門の傍にあり。右兩櫓は、文化五年燒亡後、數年を隔て、再造を命ぜられしと云ふ。

○二、丸太鼓塀

寶曆五年國目附衆尋問答書に、

二之丸矢狹間

三拾二

同所鐵炮狹間

三拾二

同所から堀

壹ヶ所

長五拾六間、幅五間

今枝直方筆記に云ふ。微妙院殿は金澤城の塀、あなたこなた崩れ候をも、亦石垣などの潰候をも御構ひなく、其の分に被成置、つねくの御意にも、國持大名の居城許を用立てんと思ふは、不覺第一と云々。江戸御座敷廻りも殊之外疎なる躰也。一年大猷公上野へ被爲成、彼方此方御尋ねありて、あれに見わたる城構のやうなる屋敷は、加賀の肥前守屋敷にて可有之と、御不快の躰にて酒井讚岐に上意あり。讚州、あれは神原が屋敷にて候。其あなたに御座候かと覚え申すと被申上しかば、御機嫌も悪しからざりしと也。ケ様の事をも聞かせられて、彌、疎に被成けると云々。今按するに、大猷公の時ならば、寛永九年將軍宣下ありしより、同十六年利常卿養老ありけるまでの事ならんか。加賀の肥前守屋敷とあるにても知られけり。

○城地俗傳話